

日時：2009年5月27日（水）13：30～14：30

会場：関西外国語大学 中宮キャンパス 図書館学術情報センター5206 教室

私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会 講演会

「歌謡・民俗行事における日本・中国・韓国 ―いくつかの具体例を辿って比較する―」

眞鍋昌弘先生の略歴を紹介後、講演会が行われた。

文部科学省科学研究費補助金による研究・基盤研究B「東アジア（日本・中国・韓国）における歌謡の比較研究」の成果の中から、東アジアにおける注目すべき民俗文化論の一端についての発表であった。

はじめに、眞鍋先生が研究対象としている歌謡にはどういったものが含まれるのかについての説明があった。「うたう」「よむ」「かく」「きく」などあらゆる形態の歌謡が研究対象であり、時代も万葉から現代までという広範囲にわたっている。また、歌謡そのものの他に、詠われた時代やその当時の生活、民俗といった雑学を知っておくことも歌謡研究には必要である。つまり、歌謡という分野では、歌謡そのものに囚われずあらゆる事に興味関心をもつ食欲が必要であるように感じた。

日本と中国には、古く遡ると多くの共通点を見つけることができる。ただ、日本の室町・江戸・明治、中国の明・清・中華民国の時代の比較研究はまだまだ少ない。今回この時代の比較研究を行うことで日本・中国・韓国三か国の共通点、相違点を明らかにした。この研究成果について具体例をあげながら説明を行った。時間の都合上、5種類の歌謡に絞っての発表であった。

1. 「歌謡学の近代」への出発―日本と中国―

日本と中国の近代的歌謡学がどのようにすすんでいったのかについての説明がはじめにあった。

日本で『熊野民謡集』が出された1922年、中国において第一次歌謡研究運動が始まった。第一次歌謡研究運動は北京大学が中心となり、週刊誌『歌謡』が刊行されたことが発端と思われる。また、北京大学に在籍していた周作人が日本に留学中、日本で歌謡蒐集の基本を学び、北京大学に戻った後、中国歌謡研究の基盤を作ったことも大きく影響している。週刊誌『歌謡』には中国語に翻訳した日本の歌謡評論がいくつか載っており、ここからも日本歌謡研究の影響をみることができる。

その後、第二次歌謡研究運動が中国歌謡集成を中心にすすめられた。この『歌謡』と『中国歌謡集成』は中国の近代歌謡を網羅しており、この二大歌謡集により中国の近代歌謡研究に必要な基礎的文献が揃った。

2. 『全浙兵制考附日本風土記』 所載山歌十二首における日本と中国

『全浙兵制考附日本風土記』とは中国から日本の軍事情報関係について記した本のことである。日本から中国へ伝わった歌謡や民謡が中国音に直され 12 首掲載されている。これによって室町時代の歌謡資料を日本人自身が把握できるのは面白い。

現代の山歌・情歌には『日本風土記』所載山歌と似たような歌謡も認められ、日本と中国の関係を、特に室町時代あたりで詠われた歌謡に注目して見ていくことがこれからの課題と考えられる。

3. 労働歌謡 日本・中国・韓国

歌謡の中には、美しく聴かせるもの、芸術として聴かせるものの他に、労働歌謡とよばれるものがある。労働歌謡は作業をする際の掛け声となり、このような掛け声も歌謡として拾いあげていかなければならない。ただ、掛け声などは伝承によるところがあるので共同研究が必要となるであろう。

労働歌謡の中でも、船曳歌の比較研究は全くなされていない分野ではあるが、日本・中国・韓国を比較すると共通点を見出すことができた。

湖南省洪江で歌われた号子、洛東江で歌われた川船曳歌の音源があり、実際に聴くことができた。力強い掛け声に注意や叱咤を合わせたこれらの歌は、考えられた言葉ではなく、自然と発せられた言葉がそのまま歌になったような印象を受けた。

4. 雨乞背花太鼓踊 日本と中国

比較研究としてはほとんどなされていない。

日本の中部・近畿以西に見られる雨乞は、室町小唄を歌いながら行う風流踊の系統である。中国にも同じように雨乞踊があり、陝西省を中心に見られる。ただ、日本の雨乞踊は美しい歌がついているのに対し、中国の雨乞踊は歌をうたわない場合が多く、もしくは南無阿弥陀を唱える念仏踊の系統がある。

5. 中世近世歌謡が歌う風景 日本と中国

中国においては、中国の雄大な景色を詠った歌謡が多い。歌謡で詠われている情景を思い浮かべること、そこに風景があることで歌の本質や意味をより深く理解できる。中国歌謡を研究する上で風景は重要な要素になるが、日本の学者はまだそこまでできていないというのが現状である。